

『エーネジデムス』とカント——  
『オプス・ポストウムム』を視野に入れ

内田 浩明

工学部 総合人間学系教室  
(2016年9月30日受理)

*Aenesidemus* and Kant with *Opus postumum* in focus

by

Hiroaki UCHIDA

Division of Human Sciences,

Faculty of Engineering

(Manuscript received September 30, 2016)

**Abstract**

In 1792, Schulze anonymously published *Aenesidemus* in order to criticize Reinhold's elementary philosophy and Kant's critical philosophy from the viewpoint of skepticism. In the VIIth and Ist fascicles of *Opus postumum*, written in 1800-1803, Kant abruptly refers to *Aenesidemus*.

The main purpose of this paper is to clarify the reason behind Kant's repeated references to *Aenesidemus* in *Opus postumum*. From an overview of Schulze's critique on the philosophies of Reinhold and Kant, his numerous references to *Aenesidemus* in *Opus postumum* indicate that Kant intended to oppose Schulze's "inference from the thinking to the being (Schluss vom Denken auf das Sein)".

キーワード ; カント、シュルツェ、ラインホルト、『オプス・ポストウムム』、『エーネジデムス』

**Keyword** ; Kant, Schulze, Reinhold, *Opus postumum*, *Aenesidemus*

## 1. はじめに

本稿の最終目的は、カント哲学、なかでも最晩年の『オプス・ポストゥムム』(以下、『遺稿』)に対するシュルツェ(Gottlob Ernst Schulze: 1767–1833)の『エーネジデムス』の影響を解明することである。周知の通り、『エーネジデムス』はドイツ観念論の思想形成に大きな影響を与えた書物の一つである。とりわけ初期のフィヒテは『エーネジデムス』を高く評価し<sup>(1)</sup>、彼の「知識学」の成立に寄与したことで知られている。このためフィヒテをはじめとしてドイツ観念論とシュルツェの関係は古くから論じられ、近年日本の研究者によっても取り上げられるテーマの一つである<sup>(2)</sup>。

一方、ドイツ観念論ほどではないにせよ、カントとシュルツェの関係についてもこれまで海外の多くの研究者が論じ、最近でも論究されている。しかし、その場合、いわゆる批判期に焦点を合わせた研究が大半を占める<sup>(3)</sup>。『エーネジデムス』におけるカント批判の多くは『純粹理性批判』を基に行われており、『エーネジデムス』の公刊は『判断力批判』より後の1792年で、カントの生前の公刊著作には『エーネジデムス』への言及は見当たらない。それゆえ、カントとシュルツェの関係についての研究が批判期に集中することはある意味では当然のことと言える。

しかるに、1800年以降に書かれたと考証される『遺稿』の第7束と第1束——とりわけ前者——においてカントは突然『エーネジデムス』に繰り返し言及するようになる。ただし、その叙述は、草稿という性格を反映し、きわめて曖昧である。こうしたことだけが理由ではないと考えられるが、『遺稿』と『エーネジデムス』について詳述した論考は、管見の限り殆ど存在しない<sup>(4)</sup>。カントが『遺稿』において突如として『エーネジデムス』に言及し始めるはなぜなのか。『エーネジデムス』への言及にはどのような意図があるのか。本稿ではこうした問題について最終的に考察してみたい。

そのための議論の順序は次の通りである。まずシュルツェと『エーネジデムス』に関する簡単な説明を行ったのち、シュルツェの懐疑論の眼目を確認する。次に『エーネジデムス』におけるラインホルトとカントに対する批判の要点を明らかにする。そして最後に『遺稿』における『エーネジデムス』への言及の意味について考察する。

## 2. 『エーネジデムス』における懐疑論の眼目

シュルツェは「エーネジデムス論評」を書いたフィヒテ、ヘーゲルの「懐疑論論文」、あるいはショーペンハウアーや新カント派等との関連で取り上げられることはあるが、必ずしも著名な哲学者ではない。そこでシュルツェと『エーネジデムス』について簡単に触れておきたい<sup>(5)</sup>。

トゥーリンゲンのヘルトルンゲンに生を受けたシュルツェは、ヴィッテンベルク大学で神学を専攻しながら論理学や形而上学を学んだのち、1785年と1786年にディッセルタチオとしてストア派とプラトンに関する研究論文をそれぞれ提出し学位を得た。その後、本格的な執筆活動を行い、1788年の『哲学的な諸学問の概要(Grundriss der philosophischen Wissenschaften)』(第1巻<sup>(6)</sup>)によってヘルムシュテット大学に哲学の正教授として招聘される。この地で22年間教鞭をとるが、1810年にヘルムシュテット大学がゲッティンゲン大学に併合されるに伴い同大学の教授となる。ゲッティンゲンでのシュルツェは、カントの批判者として有名なフェーダーの哲学サークルに関わりながら——ちなみにシュルツェの妻はフェーダーの娘である——精力的に執筆活動を行い、この地で没した。

ディッセルタチオのテーマから分かるように、シュルツェの研究の出発点は古代哲学を主体とするものであった。そして1792年に匿名でしかも出版地も記さないまま世に送り出されたのが、『エーネジデムス』、あるいはイエナのラインホルト教授によって提供された根元哲学の基礎(Fundamente der Elementar-Philosophie)について：並びに理性批判の越権に対する懐疑論の擁護』である。

シュルツェがドイツ語で表記しているエーネジデムスは、紀元前1世紀頃に活躍し、いわゆる「判断留保の十の方式」を提示したことで知られるピュロニズムのアイネシデモス(Αἰνησιδημος)を指すが<sup>(7)</sup>、ここで重要なことはシュルツェが懐疑論者のアイネシデモスを著作のタイトルに選んだことである。彼はむしろピュロニズムの懐疑論者のように判断留保によって心の平静を得るために『エーネジデムス』と銘打ったのではない。むしろその眼目は、タイトルに如実に表れているように、ラインホルトの「根元哲学」と、その成立の機縁となった「理性批判」、すなわちカントの批判哲学の「越権」を「懐

疑論」の立場から批判しようとすることにある。

その懐疑論について、エーネジデムスからヘルミナスに宛てた第二書簡——『エーネジデムス』はカントとラインホルトの哲学の信奉者ヘルミナスとその考えに疑念を抱くエーネジデムスが書信を交わす体裁でもって始められる——においてシュルツェは次のように述べている。「さて、私〔エーネジデムス＝シュルツェ〕の見解では、懐疑論とは次の主張にほかならない。哲学においては物自体とその諸性質の存在と非存在についても、そして人間の認識力の限界についてもまた、争いえない確実かつ普遍妥当的な諸原則によって何も片がつけられていない、という主張である」(Aenesidemus 26)。「物自体」や「認識力の限界」という言葉からシュルツェが特にカントを意識していることは明らかであるが、カントを批判し、しかもその直後にラインホルトの「根元哲学」が批判されている箇所では次のように述べている。「しかし、懐疑論者の確信するところでは、直観・概念・理念および人間のうちにあるすべての表象と認識とは異なっており、しかもそれらを生み出したところの真の客観的な根拠がそもそも存在するのかどうかということは、哲学並びにその諸原理の現在の状況ではいまなお全く疑問(problematisch)である」(Aenesidemus 79)。

二つの引用の末尾に「何も片がつけられていない」や「いまなお全く疑問である」とあるように、シュルツェはカントとラインホルトの双方に懐疑の矛先を向け、彼らの学説が不十分であることを指摘していくわけであるが、『エーネジデムス』の叙述の多くは「根元哲学」に割かれ、その全体構造や行論も複雑である。実際、カント哲学を集中的に批判する箇所は「根元哲学」に関する叙述の間に挿入される形になっており、「根元哲学」に関する叙述を再開した箇所でもカント批判が行われることになる。また『エーネジデムス』は450頁近い書物であるにもかかわらず、章や節の番号もなく50項を超える内容一覧(Inhaltsanzeige)が冒頭に付せられているのみで全体構造が非常にわかりにくい。

後の議論のためにも『エーネジデムス』の大まかな見取り図を論者なりの言葉で示しておきたい<sup>(8)</sup>。

- ① ヘルミナスとエーネジデムスの書簡計三通 (Aenesidemus 11-41)
- ② ラインホルトの根元哲学の解説と批判的所見

(Aenesidemus 43-83)

- ③ ヒュームの懐疑論(因果律批判)の概略とそれを基にしたカント批判(Aenesidemus 84-129)
- ④ ラインホルトの根元哲学の再説と批判的所見 (Aenesidemus 131-264)
- ⑤ ヘルミナスとエーネジデムスの書簡計二通 (Aenesidemus 265-301)

これらのうち、①は導入ないしは問題提起、⑤はいわばあとがき部分に相当するため、②～④が『エーネジデムス』の実質的な本論であると言ってよい。②と④はラインホルトの『哲学者たちの従来の誤解を是正するための寄稿集 第一巻』(以下、『寄稿集 I』)からまず引用を行い、それにシュルツェがコメントをしていく形で議論が進められるが<sup>(9)</sup>、③に対して②と④の頁数が圧倒的に多いことからカントの「批判哲学」よりもラインホルトの「根元哲学」に主眼が置かれていることは一目瞭然であろう。

これにはシュルツェがラインホルトのある点に共感していたことが関係している。それは、ラインホルトが「哲学一般の基礎」(RGS IV 15)たりうる「根本命題(Grundsatz)」の必要性を説いた点である。ラインホルトによれば「根本命題とは、それを通じて様々な他の命題が規定される」命題(vgl. Beiträge I 82)の謂いであり、したがって「第一の根本命題は、その明証性を既にそれ自身でもって、それが基礎づけるべきところの学へもたらさなければならない」(Beiträge I 86)とされるが、シュルツェは②の箇所で『寄稿集 I』から引用を行った後の最初のコメント——しかもその冒頭——で端的に次のように述べている。

これまで哲学にはなお自余一切の命題の確実性を直接的にであれ間接的にであれ基礎づける普遍的に通用する<sup>(10)</sup>最上の根本命題(ein oberster allgemeingeltende Grundsatz)が欠けていたこと、哲学はそうした根本命題を発見し提示した後にはじめて一つの学という名誉(Würde)を要求することができること、これらの点で私〔エーネジデムス＝シュルツェ〕は根元哲学の著者と完全に同じ意見である(Aenesidemus 48)。

このようにシュルツェは、これまでの哲学(むしろ、そこにはカント哲学も含まれる)は他の一切の

命題の確実性を保証し基礎付けるべき最上の根本命題というものを欠いており、そのために哲学はいまだ学ではないという点でラインホルトの見解に賛同する<sup>(11)</sup>。そもそもラインホルトによれば、「これまでのすべての哲学——カントの哲学でさえも、それが学と見なされる場合には例外ではない——が欠いているのは基礎(Fundament)にほかならない」(RGS IV 15)とされる。そしてラインホルトはこの欠点を補う「すべての理論哲学と実践哲学に共通する基礎に貢献する」自らの学を「一般根元哲学」と名付ける(vgl. RGS IV 47)。このようにラインホルトは、「理論哲学と実践哲学に共通する基礎」という観点からカントの批判哲学を批判するわけであるが、こうした全哲学の体系的導出というラインホルトのモチーフは<sup>(12)</sup>、結局のところ「根本命題」それ自身の絶対的な確実性と明証性という問題に逢着する。

全哲学の基礎を巡ってラインホルトがカント哲学を批判した内容は、彼の根元哲学についても当然問われるべき事柄となる。言い換えれば、『エーネジデムス』においてシュルツェがラインホルトに対して特に吟味しようとするのは、「根元哲学の学説が果たして普遍通用的で絶対的に第一で、それ自身によって完全に規定された——いかなる観点からもより高次の命題に服したりはしないところの——根本命題に立脚しているのかどうか」(vgl. Aenesidemus 49)、今なお哲学者たちの間で繰り広げられている論争に決着を付けるにいたるほど「果たして根元哲学は、普遍通用的で議論の余地なく明証的な前提を理論哲学と実践哲学に供するのかどうか」(vgl. ibid.)である。

このようにシュルツェがラインホルトに多くの叙述を費やす所以は、「根元哲学」が果たしてラインホルトの言うような「哲学一般の基礎」たりうるかどうかを吟味するからにほかならない。そこで、次節ではまずシュルツェによるラインホルトの「意識律」批判を瞥見し、そのうえでカント批判の要点を確認したい。

### 3. 『エーネジデムス』におけるラインホルトとカント批判

#### 3. 1 ラインホルトの「意識律」批判

ラインホルトは、1786年から翌87年にかけて雑誌『ドイツ・メルクール(Der Teutsche Merkur)』

に匿名で『カント哲学についての書簡』を連載し<sup>(13)</sup>、ラインホルトがその著者であると分かるや否や一躍有名になる。それによってイェナ大学に招聘されたラインホルトはカント哲学を講じながら、1789年に『人間の表象能力の新理論の試み』(以下、『新理論』)、1790年に『寄稿集 I』、1791年には『哲学知の基礎について』(以下、『哲学知の基礎』)、さらに1794年には『寄稿集 II』と次々と著作を公刊していく。

『新理論』を皮切りにラインホルトは表象能力論に定位した独自の表象理論を展開し、カント哲学の批判的継承ないしは体系化としての完成を目指すことになるわけだが、なかでも『寄稿集 I』以降、「根本命題」から全哲学を導出する「根元哲学」の中心に「意識の命題 [= 意識律] (Satz des Bewußtsein)」を据えることになる<sup>(14)</sup>。『寄稿集 I』において「意識律」は「意識において表象は主観によって、主観と客観から区別され、かつ両者に関係づけられる」(Beiträge I 113)と定式化され、表象をより前面に出した形としては、「表象は、意識において表象されるものと表象するものから区別され、かつ両者に関係づけられる」(Beiträge I 99)とも言われる。

特に前者の引用において「意識において表象は」とあるように、ラインホルトは「表象」に定位しながら「主観と客観」ないしは「表象するものと表象されるもの」の「区別」と「関係づけ」という観点から、「意識律」でもって、いわば意識の構造分析を行っているわけだが、ラインホルトによれば、その「意識律」は我々の意識の中で生じている「事実」(意識の事実)の直接的表現であり、しかも主観、客観、表象より根源的であるとされる。例えば、次のように述べている。「この命題 [= 意識律] がここで直接的に表現しているのは、意識において生じている事実(Tatsache)にほかならない。これに対して〔意識律は〕表象、客観、主観という概念を間接的に、すなわち、それらがかの事実によって規定されるかぎりにおいて表現するにすぎない」(Beiträge I 113)。というのも「意識に先立って表象、客観、主観という如何なる概念も存在しない。これらの概念は根源的に意識によってのみ可能である。表象、客観、主観は、この意識においてそして意識によってはじめて互いに区別され、互いに関係づけられる」(ibid.)からである。

意識の構成要素としての「表象、主観、客観」に

対する「意識（全体）」の先行性ととも、「意識律」によって意識の各構成要素の関係性が「区別と関係づけ」というかたちで「事実」として十全に説明できると確信するラインホルトは、さらに自らの哲学の「体系」という点から次のようにさえ述べている。

「意識は、そのうえに表象能力の理論が構築される本来の究極の根拠であり、基礎である。私が普遍的に通用するとみなした事実(Faktum)として想定される、客観と主観に対する表象の区別と関係づけこそが私の体系の基盤(Basis)である」(Beiträge I 194)。このようにラインホルトが「根元哲学」において表象理論を展開する際、その体系の中心に基盤として据えるのが、「主観と客観」と両者への「表象の区別と関係づけ」を「事実」として表現した「意識律」にはかならない。

前節で確認したようにシュルツェは、ラインホルトの「根本命題」からの全哲学の導出ないしは基礎付けという点に賛同しており、根元哲学の「根本命題」は「意識律」であった。そこで、ここではシュルツェの最大の関心事でもある「意識律」を中心に彼の批判を瞥見することにする。

ラインホルトの「意識律」に対するシュルツェの批判は、次の三点——そこから導き出されるシュルツェの見解も含めれば五点<sup>(15)</sup>——である。

1. 意識律はラインホルトの言うような「いかなる観点からも他の命題に支配されることのない、端的にいかなる他の命題によっても規定することのない絶対的な第一の根本命題などではない」(vgl. Aenesidemus 52)。
2. 意識律はラインホルトの言うような「それ自身によって汎通的に規定された命題」ではない(vgl. Aenesidemus 54)。
3. 意識律はラインホルトが言うような「普遍通用的な命題ではないし、特定の経験やある種の推論(Raisonnement)に結びつけられておらず、むしろすべての可能的経験や我々が自覚するすべての思想に伴うような事実を表現するでもない」(vgl. Aenesidemus 58)。

1. について言えば、ラインホルトが意識律を根本命題として根元哲学の基礎に据えるのは、それがまさにいかなる意味でも他の命題のもとにも服さず、規定されることがないからである。しかしシュルツ

ェによれば、「意識律」が「主語と述語」との「結合」を含む「命題(Satz)」であるかぎり、「その形式に関して」「矛盾の原理 [= 矛盾律] に依存している」とされる(vgl. Aenesidemus 52f.)。2. については、意識律に含まれる「主観、客観、表象」の「区別(Unterscheiden)と関係づけ(Beziehen)」という言葉の使用——例えば、区別に関しては、部分的な区別か統一的な区別か、根拠が根拠付けられるものから、実体はその属性から、あるいは形式が質料から区別されるようになど——が曖昧で一義的ではないがゆえに、意識律は汎通的に規定されているどころか様々な解釈を許容するほど無規定であるとされる(vgl. Aenesidemus 54ff.)。3. に関して、シュルツェはまず意識律が「普遍通用的な命題ではない」理由として2. と同じく意識律が多様な解釈を許容することを挙げ(vgl. Aenesidemus 59)、そのうえで、意識律がラインホルトの言うような「事実」ではない理由として、意識律のうちに含まれる「主観、客観、表象」や「表象が主観と客観に関係づけられる」ということが意識に出現していないことが現実にあることを指摘する。例えば、シュルツェは、表象と客観そのものの区別という観点から、私が「私の外部に現実に存在しているとされる対象を直観する」ときには「私の自我やそのうちに現前している表象とは異なった客観の知覚を欠いている」というような例などを挙げながら、直観においては「表象が関係づけられるという客観から表象は全く区別されない」(vgl. Aenesidemus 60) とし、意識律で表現されている事態が必ずしも意識で生じている事実ではないと批判する。

このようにシュルツェはラインホルトの「根元哲学」の中核概念である「意識律」を徹底的に批判するわけだが、意識律批判を展開したのちシュルツェは、さらに意識律に含まれる「主観」、「客観」、「表象」のそれぞれや「表象能力」を批判していくことになる。この4つの概念のうちとりわけ前三者はカント哲学でも頻出し、「表象能力」についてはシュルツェがカントに対しても用いる概念である。しかし、既に触れたようにシュルツェの最大の関心事が果たしてラインホルトの根本命題が絶対確実なもので哲学一般の基礎たりうる原理であるかどうかであった。そこで、むしろ本稿のテーマにとってより重要なカント批判へと考察を移すことにしたい。

### 3. 2 カント批判

『エーネジデムス』におけるカント批判は、ラインホルト批判に挟まれた「ヒュームの懐疑論は本当に(wirklich)理性批判によって論駁されたのか」(Aenesidemus 98)と題された節で最も集中的に行われる。この問いに対してシュルツェはもちろん否と答えるわけであるが、上述箇所のシュルツェの叙述は、カントの議論をいったん認めたとすえ、それに対する彼自身の批判的見解を述べ、そこからさらにカント主義者からの予想される反論を示しながら、それに抗弁していくというスタイルを随所でとっている。このため叙述は冗漫で議論もかなり複雑なものとなっている。

シュルツェがカントの批判哲学の問題点として挙げるのは、管見によれば「必然的な総合判断の心性(Gemüt)からの導出」、「(現実性や原因と結果の)カテゴリーの適用」、そして「思惟から存在への推論(Schluss vom Denken auf das Sein)」<sup>(16)</sup>の三点である。これらの問題は実際にはいずれも密接に関連し合っているだけではなく、一部はラインホルト批判にも関係しているが、とりわけ「思惟から存在への推論」はカントがヒュームを論駁していない最大の論拠とシュルツェが見なしているという意味で重要である。

ラインホルトを批判するときとは対照的に、カント批判に際してシュルツェはほとんど引用を行わず、独特の表現をすることもしばしばである。上の「必然的な総合判断」とは、カントが「ア・プリオリ」の第一の特性を「必然性」としていることから(vgl. B3)、「ア・プリオリな総合判断」を指している。また、「心性」ということでシュルツェが念頭に置いているのは、カントの用語で言えば超越論的な主観としての統覚であるが、シュルツェ自身の言葉では「心性」としての「物自体」や「可想体(Noumenon)」である。実際、次のように言われている。「批判哲学に従えば、心性は我々の認識における必然的なものの源泉をなすとされる。そのかぎり、心性ということで理解されるべきは、物自体、あるいは可想体もしくは超越論的理念であるのかのいずれかである」(Aenesidemus 113)。こうしたことから、前記の「必然的な総合判断の心性からの導出」とは、ア・プリオリな総合判断を物自体ないしは超越論的な主観から導出することを意味していることになる。

ちなみにシュルツェは、「人間の認識のうちに必然的な総合判断があるということ、そして必然的な総

合判断は人間の認識の欠くことのできない構成要素となっているということは否定しがたい事実(Tatsache)であり、それ自体、決して疑われるべくもない」(Aenesidemus 98)と明言しており、ア・プリオリな総合判断の存在やその意義を疑っているわけではない。したがって、シュルツェが問題視しているのは、ア・プリオリな総合判断の「心性からの導出」ということになる。この点についてシュルツェは次のように述べている。「理性批判が我々の内に必然的な総合判断が存在することを物自体としての心性から導出したとするならば、理性批判はその固有の諸原則に信頼を置くことはできないだろう」(Aenesidemus 114)。このようにア・プリオリな総合判断の存在と意義を認めているシュルツェが心性からの導出ということ認めないのは、彼が「心性」を「物自体」と見なし、その物自体としての心性からア・プリオリな総合判断を導出していると考えているからに他ならない。

周知の通り、カントの批判哲学——正確にはその理論哲学の領域——においては物自体、ヌーメノン、理念などの超感性的な対象は、我々人間にとっては認識不可能とされる。それは、これらの対象のいずれに対しても感性的直観の多様が与えられないためにカテゴリーが適用できないからである。こうしたことを踏まえ、シュルツェはカントを次のように批判している。

しかしながら、必然的な総合判断の〔心性としての〕物自体からのこうした導出は、批判哲学の精神全般に明らかに矛盾しているであろうし、批判哲学に従えば人間には全く不可能なはずの認識を前提してしまっているであろう。つまり、批判哲学の最も重要な原理や結論に従えば、原因や現実性のカテゴリーの適用が意味と意義を持ちえるのは、ただ経験的な直観に適用される場合のみである。しかるに我々は、いわゆる表象する主観を直観することができず、批判哲学自身も認めるように内官の変化を直接的に知覚するにすぎないのだから、このいわゆる主観もまた我々にとって認識可能な対象の領域に属することはできない。それゆえ、批判哲学自身の主張に従って、上記のいわゆる主観には認識可能で実在的な現実性も認識可能で実在的な原因性(Kausalität)も付与してはならないのである(Aenesidemus 113f.)

(17)。

このようにシュルツェは、「必然的な総合判断」を物自体としての心性から導出することは批判哲学では本来認識不可能であるはずの超越論的な主観へとカテゴリーを適用してしまっているために、批判哲学の原理・原則に矛盾している、と「カテゴリーの適用」という観点からカントを批判するわけであるが、カテゴリーのなかでも「原因」ないしは「原因性」、そして「現実性」が採り上げられているのには当然のことながら理由がある。「原因」や「原因性」に関して言えば、物自体などの超感性的な主観である心性からア・プリオリな総合判断を導出するということは、結局そうした心性・主観がア・プリオリな総合判断の原因・根拠となるからである。実際、心性に関して「必然的な総合判断の原因」(Aenesidemus 104)、「必然的な総合命題の作用因(die wirkende Ursache)」(Aenesidemus 102)、あるいは「必然的な総合判断の根拠」(Aenesidemus 117)や「必然的な総合判断の实在根拠(Real-Grund)」(Aenesidemus 99)という表現が『エーネジデムス』には数多く見られる。もう一方の「現実性」のカテゴリーは、「思惟から存在への推論」により深く関わっている。長い引用になるが、シュルツェは心性からの必然的な総合判断の導出と関連させながら次のように述べている。

唯一の方法で我々によって可能なものとして表象されうるものは、またこの唯一の方法でしか可能ではありえない。

我々の認識における必然的な総合判断は、我々がそれを心性とそのア・プリオリに規定された行為の様式(Handlungsweise)に起因するものとみなすことを通じてのみ我々によって可能なものとして表象されうる。

ゆえに、我々の認識における必然的な総合判断もまた心性とそのア・プリオリに規定された行為の様式からのみ現実に起因していることができるのである。

要するに、理性批判は、そこから、我々が必然的な総合判断を心性から導出するより他には我々には我々の認識における必然的な総合判断の可能性を表象したり考えたりできないがゆえに、この判断は現実にも実際にも(auch wirklich

und realiter)心性に起因するにちがいないことを証明する。したがって理性批判は我々の内にある表象や思考の性質から我々の表象の外部に存在するものの客観的で実在的な性質へと推論しているのである。すなわち、あるものは実際にかくかくしかじかの性質であるにちがいない、なぜなら、そのあるものはそれ以外には考えられないからである、と理性批判は証明しているのである。まさにこの推論こそヒュームがその妥当性を疑った当のものであり、我々の表象やその徴表が客観やその徴表にどの程度一致するのか、そして我々の思考の内に存在するものが我々の思考の外のあるものにどの程度関係しているのかということの規定することができるようないかなる原理も我々は知らないという理由から彼が詭弁(Sophistikation)と明言した当のものである(Aenesidemus 104)<sup>(18)</sup>。

シュルツェに従えば、カントは冒頭にあるような三段論法を基に、ア・プリオリな総合判断の思考ないし表象の「可能性」からその「現実性」や我々の内にある表象や思考からその外部に存在するものの客観的・実在的な性質への推論を行っており、まさにそうした表象や思考からその外に存在する対象の客観的・実在的な性質へと推論することの妥当性こそヒュームが疑い詭弁だと称したものだと言われる。こうした内容のうちヒュームの疑念については、シュルツェが理由としている内容も含め、叙述として正しいものと言えるだろう。

では、カントに関する記述についてはどうだろうか。実際にカントは、シュルツェの言うような三段論法的な推論を行うことによってア・プリオリな総合判断を導出し、表象や思考からその外に存在する対象へと推論するような思考法を採っているのだろうか。管見によれば、この推論はむしろラインホルトの叙述とそれに関するシュルツェの理解に負うところが大きいように思われる<sup>(19)</sup>。

ラインホルトは表象と表象能力との関係について次のように述べている。「表象能力とは、それによって単なる表象が、すなわち、意識において客観と主観に関係づけられ、しかし両者から区別されるものが可能になるものであり、表象の原因において、すなわち、表象の現実性の根拠を含むものにおいて、一切の表象に先立って現存し(vor aller Vorstellung

vorhanden sein)なければならないものである」(Beiträge I 119)。あるいは、『新理論』においても「表象とは、その現実性について全ての哲学者が一致する唯一のものである。少なくとも一般に、哲学の世界において一致している何らかのものがあるとすれば、それは表象である。[…中略…]しかし、ある表象を認める人は表象能力も認めなければならない。表象能力とは、それがなければ如何なる表象も考えることができないものを意味する」(RGS I 121)とされている。

このようにラインホルトは、全ての哲学者が一致する唯一のものとして考えられるのが表象であり、その表象の原因ないしは現実性の根拠として、表象能力が表象に先立って現実存在することを力説しているが、こうしたラインホルトの表象論に対してシュルツェは次のように批判的に述べている。「ところが、根元哲学は、現実の表象をある客観的に現実的なものとしての表象能力から導出し、この表象能力を表象の原因と説明することによって、根元哲学の根本命題並びに理性批判の結論と矛盾するのである」(Aenesidemus 79)。ラインホルトの表象と表象能力について述べているこの引用において、シュルツェはラインホルトだけではなくカントにも言及しているが、このことは「思惟から存在への推論」というシュルツェのカント批判がラインホルトの表象理論に少なからず関係していることを示唆しているという点で重要である。

実際、シュルツェは「批判哲学の主張によれば、ある対象の表象が我々の内で現存している規定と徴表の大部分は、我々の表象能力の本質に基礎付けられているはずである」(Aenesidemus 74)といった具合に批判哲学を表象能力に定位させると共にまさに先のラインホルトの『新理論』からの引用の直後に「批判哲学の友人」という言葉を用いつつ「我々の内にある表象と思考の性質から我々の外部にある事象(Sache)と事象自体の性質へと推論している」(vgl. Aenesidemus 77)とも述べている。また、さらに本稿で『エーネジデムス』の結論部分に当たるとした⑤の箇所においては、より直接的な表現で次のようにも述べている。「理性批判においては、我々は我々に必然的な総合判断を心性から起因するものとしてしか考えることができないがゆえに、心性はまた現実的に必然的な総合判断の源泉でなければならない

ことが主張される。しかるに、根元哲学においては、どの表象も[…中略…]一方は客観に他方は主観に起因する二つの異なった構成要素から成立しているものとして考えられねばならないがゆえに、どの表象もまた二つの異なった構成要素から現実的に起因していると言われる。さてしかしながら、こうした思惟されねばならないものから現実的で実在的な存在への推論(Schluss von dem Gedachtwerdensein auf das wirkliche und reale Sein)は、全くの誤りであって徹頭徹尾何も証明しえないだけではなく、空虚で互いに矛盾するあらゆる詭弁(Vernünftlelei)の基礎である」(Aenesidemus 273f.)。このように、カントのみならず、意識律を全哲学の根本命題と見なしたラインホルトも「思惟から存在への推論」を行っているシュルツェが考えていることから、シュルツェのカント批判はラインホルトの表象理論と密接に関わり、そこから得た着想であると考えられるであろう。

以上、これまでの考察をまとめれば次のように言うことができるだろう。シュルツェは『エーネジデムス』において「必然的な総合判断の心性から導出」、「カテゴリーの適用」、「思惟から存在への推論」の三つの観点からカントを批判しているが、このうち「思惟から存在への推論」についてはラインホルトの表象理論にかなりの影響を受けたものである。

では、こうしたシュルツェの批判に対してカントはどのように考えているのであろうか。この点を解明するために、次節では『遺稿』を中心に論究してみたい。

#### 4. 『オプス・ポストウム』におけるエーネジデムス

本稿の「はじめに」において『遺稿』が草稿であるため、『エーネジデムス』の叙述が断片的であったり非常に曖昧であることを指摘しておいたが、ここでは、いくつかを例示することから始めよう。

テアイテトス(Theätet)とエーネジデムス。空間と時間における主体の定立(Position)の諸原理(XXII 4)。

エーネジデムス。主体は認識の可能性のために単に形式的なものに関して諸表象の体系を基礎づけ

るので、主体がそれによって自己自身を作るところの感官の客体の観念性の原理。——空間と時間は単に直観の主観的な形式、すなわち、現象における客体の表象の主観的な形式である(XXII 72f.)。

空間と時間は、物自体(entia per se)ではなく、感官の表象の単なる形式である。

ア・プリアリな純粹直観としてのすべての表象の観念性の原理〔。〕私は私自身を私の外なる感官の対象にする(ich mache mich selbst zum Sinnengegenstande ausser mir)(エーネジデムス)(XXII 99)。

これらの引用でエーネジデムスという文言が文頭に記されたり文末の括弧の中に挿入されているが、こうした書き方をカントがすることは『遺稿』では決して珍しいことではない。例えば、スピノザやリヒテンベルクの場合にも同様の書き方が見られる。しかし、スピノザやリヒテンベルクに言及する際には、「スピノザによれば(nach Spinoza)」(XXI 43, XXII 54)、「リヒテンベルクによれば」(XXI 127)、「リヒテンベルクとスピノザによれば」(XXI 69)といった具合に、その考えがスピノザやリヒテンベルクのものである(あるいは少なくともカントがそのように考え解釈している)ことが明記されることが多い。

これに対して、エーネジデムスの場合には、カントはそうした書き方をしてはいない。このため、先の引用において、どの部分がエーネジデムスの考えに相当するのか、あるいは、そもそもエーネジデムス自身の考えが含まれているのかどうかさえ必ずしも分明ではない。さしあたり言えることとしては、「空間と時間」とその「観念性」、そして「自己定立論」の文脈においてエーネジデムスが言及され、前節で見た「必然的な総合判断の心性から導出」及び「カテゴリーの適用」というカント批判の文脈では述べられてはいないことである。従って、本節冒頭のカントの文言は、シュルツェの「思惟から存在への推論」を念頭に書かれたものであると推察される。

このことは『エーネジデムス』が出版されたのとまさに同じ年の1792年12月4日付のJ.S.ベック宛書簡から証示することができる。カントは次のように記している。

批判的観念論を私は空間と時間の観念性の原理と呼んだ方がよいと思えるのですが、これをバークリの観念論と同じだとするエーベルハルト氏とガルヴェ氏の考えは全く顧慮するに値しません。というのも私は表象の形式に関する観念性について語っていますが、彼らはそこから質料、すなわち客観とその現実存在それ自身に関する観念性を作り上げるのですから。しかし、エーネジデムスという通り名でどなたかがさらに一歩進んだ懐疑論を開陳しています。つまり、そもそも我々の表象が(客観としての)何か他のものに対応しているかどうかを我々は全く知ることができないと言うのです。これは、ある表象が表象である(あるものを表象している)かどうかというのと同じことを言っていることになるでしょう。というのも表象とは、我々がそれを何か他のもの(その場所を表象が言わば我々の内で代表する)へと関係づけるところの我々の内なる規定を意味するのですから(XI 395)。

この書簡の前半部分では、カント自身の観念論が質料的観念論ではなく、あくまで形式的観念論であり、バークリ流の観念論とは異なる、という『プロレゴメナ』の付録等で述べた見解を強調しつつ、エーベルハルトとフェーダー＝ガルヴェの批判的外的外れであることを力説している。後半部分では、こうした批判よりも『エーネジデムス』が「一歩進んだ懐疑論」を述べているとしつつも、我々の表象がその表象の外なる何かあるもの(すなわち客観・実在)に対応しているかどうかは我々には全く認識不可能というシュルツェの批判も、表象という言葉の内実からして全般的外的外れであることが述べられている。

上記の内容のうち、とりわけ、我々の表象がその表象の外なる何かあるもの(すなわち客観・実在)に対応しているかどうかは我々には全く認識不可能であるという、この批判こそ『エーネジデムス』においてカントがヒュームを論駁できていないと見なしていたものであった。『遺稿』においてカントがシュルツェに言及するのは、まさに、この点に関してシュルツェを批判するためであると考えられる。

実際、『遺稿』の他の箇所では「思惟の作用」や「私

の内と外」という表現を用いつつ、カントは次のように述べている。「思惟の第一の作用 [=活動] は、現象としての私の内と外にある客体の観念性の原理を含んでいる。すなわち、私自身を触発する主体の原理を諸観念の体系において含んでいるが(Der erste Act des Denkens enthält ein Princip der Idealität des Objects in mir und außer mir als Erscheinung d.i. des mich selbst afficirenden Subjects in einem System der Ideen)、この諸観念は単に経験一般へ進んでゆくものの形式的なものを含んでいる(エーネジデムス)。すなわち、超越論哲学は一つの観念論である」(XXI 99)。この引用では、思惟作用しかもその第一の作用が「現象としての私の内と外にある客体の観念性の原理を含んでいる」とされ、「超越論哲学」の「観念論」の側面が強調されているが、超越論的観念論(者)は同時に経験的実在論(者)である、というのが『純粹理性批判』以来のそもそものカントの主張である(vgl. z.B. A369ff.)。つまり、現象は物自体ではなく、表象であるという意味では観念論であるが、現象は単にそのように見えるというような仮象ではなく、空間と時間という感性のア・プリオリな形式を通じて我々に与えられる限り経験的対象として存在するという意味では実在論である。

あるいは、観念論や観念性という語はないものの、「自己自身を客体として構成するもの(ein sich selbst als Object constituirendes)は、単に思惟可能な(思惟されうる cogitabile)存在者であるだけではなく、私の表象の外に与えられる(与えられうる) 現実存在している存在者(existirendes, ausser meiner Vorstellung gegebenes (dabile) Wesen)であって、この存在者はア・プリオリに自己自身を対象にし(エーネジデムス)、主体としてのその存在者の表象は同時に直接的に自己自身の客体、すなわち直観である」(XXII 107)とも述べられている。

文意が必ずしも明瞭ではないが、「自己構成」「自己客体化」を意味するカントの「自己定立」は、自己を「思惟の対象」とするはたらきと自己を「直観の対象」とする二つのはたらきからなり、後者が思惟の外側の空間・時間中に自己を現実存在せしめる勝義におけるカントの自己定立である<sup>(20)</sup>。また、本節冒頭の3つ目の引用で「私は私自身を私の外なる感官の対象にする」ことが「ア・プリオリな純粹直観としてのすべての表象の原理」に関係させられ

ていたことも勘案すれば、先の引用は、主体が自己を単に思惟や反省の対象にするのではなく、ア・プリオリに自己を直観の対象とすることによって自らを表象の外に与えられる現実存在にする事態を言ったものとも解せよう。また、この「表象の外に与えられる現実存在」についてカントが語っているということから、あくまで表象の外なる客観の性質が我々人間にとって知り得ないとするヒュームに依拠しつつカントを批判するエーネジデムスは、カントの目には「エーネジデムスは自己の内で規定的〔である〕(Aenesidemus in sich bestimmend)」(XXII 104)というふうに映ただろう。

#### 【凡例】

カントの著作からの引用は、アカデミー版カント全集 (Kant's gesammelte Schriften, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin 1900ff.) の巻号をローマ数字で、ページ数をアラビア数字でそれぞれ本文中に記した。ただし、『純粹理性批判』からの引用は、慣例に従い、第一版を A、第二版を B とした。

引用文中のゲシュペルト、イタリック体等の強調は、傍点で示した。

[ ] は引用者による補足である。

#### 【文献表】

- Basile, Giovanni Pietro, *Kants Opus postumum und seine Rezeption, Kantstudien-Ergänzungshefte Bd. 175*, Berlin / Boston 2013.
- Bondeli, Martin, *Apperzeption und Erfahrung: Kants transzendente Deduktion im Spannungsfeld der frühen Rezeption und Kritik*, Basel 2006.
- , *Das Anfangsproblem Bei Karl Leonhard Reinhold: Eine Systematische und Entwicklungsgeschichtliche Untersuchung zur Philosophie Reinholds in der Zeit von 1789-1803*, Frankfurt a.M. 1995.
- Cassirer, Ernst, *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit(2. Aufl.), Bd. 3*, Berlin, 1923, S. 59f. 邦訳: 須田朗・宮武昭・村岡晋一 訳: カッシーラー『認識問題 近代の哲学と科学における 3』、みすず

- 書房、2013年。
- Fichte, Johann Gottlieb, *Briefwechsel 1793-1795*, in: herausgegeben von Reinhard Lauth und Hans Jacob unter Mitwirkung von Manfred Zahn, *Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, III, 2*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1970. (GA III/2)
- Jaeschke, Walter / Arndt, Andreas, *Die Klassische Deutsche Philosophie nach Kant: Systeme der reinen Vernunft und ihre Kritik 1785-1845*, München 2012.
- Hankinson, R. J., Aenesidemus and the Rebirth of Pyrrhonism, in Bett, Richard (ed.), *The Cambridge Companion to Ancient Scepticism*, Cambridge 2010, pp. 105–119.
- Hoyos, Luis Eduardo, *Der Skeptizismus und die Transzendentalphilosophie: Deutsche Philosophie am Ende des 18. Jahrhunderts*, Freiburg / München, 2008.
- Reinhold, K. L., *Beiträge zur Berichtigung bisheriger Mißverständnisse der Philosophen. Erster Band, das Fundament der Elementarphilosophie betreffend* (Philosophische Bibliothek; Bd. 554a), Mit einer Einleitung und Anmerkungen herausgegeben von Faustino Fabbianelli, Hamburg 2003.
- , *Ueber das Fundament des philosophischen Wissens nebst einigen Erläuterungen über die Theorie des Vorstellungsvermögens (Gesammelte Schriften: kommentierte Ausgabe Bd. 4)*, herausgegeben von Martin Bondeli unter mitwirkung von Silvan Imhof, Schwabe 2011.(RGS IV)
- , *Versuch einer neuen Theorie des menschlichen Vorstellungsvermögens*, (Gesammelte Schriften: kommentierte Ausgabe Bd. 1), herausgegeben von Martin Bondeli und Silvan Imhof, Schwabe 2013.(RGS I)
- Schulze, Gottlob Ernst, *Aenesidemus oder über die Fundamente der von dem Herrn Professor Reinhold in Jena gelieferten Elementar-Philosophie Nebst einer Verteidigung des Skeptizismus gegen die Anmaßungen der Vernunftkritik* (Philosophische Bibliothek; Bd. 489), herausgegeben von Manfred Frank, Hamburg 1996.
- 内田浩明「カントとフィヒテの自己定立論」、『大阪工業大学紀要』人文社会篇、第54巻 第2号、2010年、1-14頁。
- 栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』、未来社、2011年。
- セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』(金山弥平・金山万里子訳)、京都大学学術出版会、1998年。
- 瀬戸一夫「カントとフィヒテの間」(『講座ドイツ観念論 3 自我概念の新展開』、廣松渉・坂部恵・加藤尚武編 所収)、弘文堂、1990年、15–72頁。
- 田中瀧山『セクストス・エンペイリコスの懐疑主義思想：古代懐疑主義をめぐる批判と回答』、東海大学出版会、2004年。
- 山口祐弘「ラインホルト／シュルツェ」(『哲学の歴史 7 理性の劇場：18—19世紀 カントとドイツ観念論』所収)、中央公論新社、2007年、265–297頁。
- 【註】
- (1) 例えば、フィヒテは「エーネジデムス論評」公刊前年の1793年のフラット宛書簡のなかで「我々の世紀のもっとも注目すべき(bemerkenswertest)作品のうちの一つ」(GA III/2, 19)と『エーネジデムス』を称賛し、同年12月のシュテファニー宛書簡においては『エーネジデムス』によって「ラインホルトは私のもとで崩れ去り、カントは私にとって疑わしくなり、私の体系全体を根底から覆しました」(GA III/2, 28)とさえ述べている。
  - (2) 一例として、ここでは、(栗原隆、2011年の第六章)を挙げておく。
  - (3) 現在刊行中の『ラインホルト全集』の編者でシュルツェにも精通しているボンデリですらカントとラインホルト、マイモン、シュルツェらとの関係について詳しく論じているにもかかわらず、『遺稿』については僅かに論及しているのみである(vgl. Bondeli 2006, S. 11, 44)。あるいはラインホルト、シュルツェ、マイモンの三人を主題とするオヨスの研究もシュルツェとの関連において多くの箇所でもカントに言及しているが、『遺稿』に関する論及はない(vgl. Hoyos, 2008, S. 140-207, insb. S. 166-207.)
  - (4) 欧米の『遺稿』研究史に関する500頁を超える大著が2013年にドイツで公刊されたが、ファ

イヒンガー、ドレフス、アディッケスの箇所ではシュルツェ（エーネジデムス）について僅かに触れられているのみである(vgl. Basile, 2013, S. 38 Anm., S. 42 Anm., S. 71.)。もちろん、浩瀚な書物であるからといって、それまでの『遺稿』研究の全てを網羅しているわけではないし、当該書で採り上げられた研究者の中にも、例えば、アディッケスやマチューのように、実際には『エーネジデムス』に言及している者もいる。しかし、この両者とも主題的に扱っているわけではない。

- (5) 以下の叙述は、本稿が『エーネジデムス』のテキストとして用いた『哲学文庫(Philosophische Bibliothek)』の編者 Manfred Frank による「序論(Einleitung)」の Xf.を基にしている。なお、日本でシュルツェの生涯と学説について平明に論じた文献としては、山口祐弘「ラインホルト／シュルツェ」(『哲学の歴史 7 理性の劇場：18—19 世紀 カントとドイツ観念論』所収)、中央公論新社、2007 年、265—297 頁がある。
- (6) 第一巻に続けて 1790 年には第二巻を公刊している。ちなみにシュルツェによれば、哲学全体は「心理学」「形而上学」「道徳学(Moral)」からなるとされ(vgl. Grundriß I 12)『哲学的諸学の概要』の第一巻で「心理学」、第二巻で「形而上学」(第一部「存在論」、第二部「自然神学」、第三部「超越論的宇宙論」)がそれぞれ論じられているが、形而上学とは別に心理学を大きく取り扱っている点が特徴である。
- (7) 「十の方式」の詳細については、(セクストス・エンペイリコス (金山弥平・金山万里子訳)、1998 年、25 - 78 頁)を参照。セクストス・エンペイリコスとアイネシデモスについては、(田中瀧山、2004 年、6 - 8 頁)を参照。あるいは、最近の海外の文献では、次の論文がアイネシデモスの懐疑論の構造やセクストス・エンペイリコスにおけるアイネシデモスの叙述に関する検討を加えており、示唆に富む(Hankinson, 2010, pp. 105—119.)。
- (8) シュルツェ自身の内容一覧は Aenesidemus 2-7 を参照。また編者が別様に付した目次 (Inhaltsverzeichnis)に相当する Inhalt は Aenesidemus III-VII を参照。
- (9) 詳しく言えば、シュルツェは『寄稿集 I』の第三論文「根元哲学の主要契機の新叙述」に沿った形——正確には②では第一節から第八節まで、④では第九節から第三六節まで——で議論を進めている。ちなみに、『寄稿集 I』の第三論文そのものはシュルツェが『エーネジデムス』で論じている第三六節からさらに叙述は続き、第四四節が最終節となっている(vgl. Beiträge I 161ff.)。
- (10) ラインホルトは、たんに普遍的な原理・原則が個別事象に適用される「普遍妥当的 (allgemeingültig)」とそうした原理・原則が万人に真に理解され受け入れられる「普遍通用的 (allgemeingeltend)」とを区別し、『カント哲学についての書簡』以降、後者を好んで用いている。両者の区別については『新理論』第一巻第一節を特に参照(RGS I 42)。また、両概念の解説は、(Bondeli, 1995, S. 102.)を参照。
- (11) この点については、カッシーラーも「シュルツェの懐疑の根本傾向」と関連させながら次のように述べている。「したがって、エーネジデムスの懐疑とあらゆる哲学の最高の「明証的」原理を手に入れようとするラインホルトの努力は共通の領域を実は最初から分けもつのである」(Cassirer, 1923, S. 59f., 邦訳：須田朗・宮武昭・村岡晋一訳、2013 年、59 頁〔一部改訳〕)。
- (12) イェシュケとアルントは、カント以降のラインホルトからシュルツェを経てフィヒテへと至るまでの一連の流れを『「理性批判」から『理性の体系』へ』という観点から叙述しているが(vgl. Jaeschke / Arndt, 2012, S. 38-58.)、ドイツ観念論はもとよりラインホルトの哲学的モチーフもまさに「理性の体系」への志向にあったと言えよう。
- (13) ちなみに、著作としての『カント哲学についての書簡』の公刊は、第一巻が 1790 年、第二巻が 1792 年であり、『新理論』よりむしろ遅い。また、『ドイツ・メルクール』誌掲載時と単行本では内容が異なる箇所がある。詳細については、RGS II/1 S. Xif., RGS II/2 S. XIIIff.を参照。
- (14) たしかに『新理論』においても既に「我々は、意識によって強制されて、どの表象にも表象する主観と表象される客観が属しており、両者は表象に属しつつ、表象から区別されなければならない、ということで意見が一致している」(RGS I 128)と述べられている。しかし「意識律」という言葉そのものは『新理論』には見受けられない。「意識律」というタームでもって先鋭化するとともにその内容について詳論されることになるのが『寄稿集 I』である。
- (15) シュルツェは、『エーネジデムス』における所見の本来の意図は根元哲学があらゆる哲学的営為(Philosophieren)の確実な原理などではないことを明らかにすることにあるとの理由から、確実な原理が何であるのかという問いに答えることを控えるとしたうえで、意識律についてさらに二つの批判的な見解・コメントを付け加えている(vgl. Aenesidemus 61)。すなわち、4.

意識律は「総合命題」であり(vgl. *ibid.*)、5. 意識律は意識のある特定の現れに共通するものからの「抽象による命題(ein abstracter Satz)である」(vgl. *Aenesidemus* 62)との批判的見解を付け加えている。

意識律に対するこれらの批判と見解について『エーネジデムス』の叙述を追いながら丁寧に説明している最近の研究としては、オヨスの次の箇所が挙げられる(vgl. Hoyos, 2008, 144ff.)。

国内では、(瀬戸、1990年、31–33頁)が1～3について明快に説明している。

- (16) この表現はボンデリによるものだが(vgl. *Bondeli*, 2006, S. 257.)、後に本文でも引用するように、シュルツェ自身はヒュームを離れカントの「理性批判」とラインホルトの「根元哲学」を批判する文脈で「思惟されねばならないものから現実的で実在的な存在への推論(Schluss von dem Gedachtwerdesein auf das wirkliche und reale Sein)」(*Aenesidemus* 273)という表現をしている。
- (17) 「空虚な思考物(ein leeres Gedankending)」という言葉を用いながら、さらに強い調子で次のようにも言われている。「可想体としての心性が〔…中略…〕認識における必然的なものの原因だというのであれば、理性批判は空虚な思考物を〔…中略…〕我々の認識の構成要素の源泉にまで高め、この思考物に原因のカテゴリーを適用することになり(*Aenesidemus* 116)、「我々の認識における必然的なものの心性からの導出——この導出の正当性と真理性に批判哲学の最も重要な成果の信頼性はかかっているのだが——は、形式からいえば、本来、まったく真理性をもたない思想にすぎないということになるであろう。したがって、心性は必然的な総合判断の根拠であるという命題から結論として引き出される理性批判におけるすべてのものに対して、理性批判自身の教説にしたがい、その確実性と真理性が否認されねばならないであろう」(*Aenesidemus* 117)。
- (18) この引用と同じく「思惟から存在への推論」に関して、別の箇所では次のように述べられている。『純粹理性批判』が人間の心性の根源的な諸規定を我々の認識における必然的な総合判断の実在根拠ないしは源泉と称するがぎり、そして『純粹理性批判』において、かかる〔必然的な総合〕判断の根拠として我々が考えるのはただ表象能力だけだということから心性がまた

現実に(wirklich)も必然的な総合判断の根拠でなければならないと推論されるがぎり、『純粹理性批判』においては、)一つには、我々の認識のうち現に存在しているものすべてについて、実在根拠と我々の認識のうち現に存在しているものとは実在的に(realiter)異なる原因もまた客観的に存在しているとともにそもそも充足理由律というものもまた単に諸表象とそれらの主観的な結合についてだけ妥当するのではなく、事柄そのものやそれらの客観的な関連についても妥当するということが、[そして]また一つには、我々の諸表象の内にある何らかのもの、の性質から我々の外部にある何らかのもの、の客観的な性質へと推論する権限が我々にはあるということが既に争いの余地なく確実で確定的なものとして前提されてしまっているのである」(*Aenesidemus* 99)。

- (19) ちなみに、「表象の実在根拠」として「表象能力が現実存在」するというラインホルトの考えを「推論」として捉え直すオヨスは、先のカント批判で用いられていた推論を参照するように指示しつつ「表象が存在する。表象はそれを産み出す表象能力なくしては、考えられることができない(nicht gedacht werden können)。ゆえに、表象能力は現実存在する(existieren)」(Hoyos, 2008, S. 151)という形で定式化している。こうしたことも「思惟から存在への推論」というカント批判がラインホルトの表象理論と密接な関係にあることの一つの証左となるだろう。
- (20) この点については、(内田、2010年)を参照されたい。

【謝辞】本稿は科研費(プロジェクト番号: 16K02150)の研究成果の一部である。

